コース11 藤白坂越

藤白の名前は有間皇子の歌で知られています。この地で処刑された有間皇子の悲劇を想いながら藤白の急坂を登ります。峠を越えた御所の芝から見渡す海は、熊野古道でも有数の景色と言われています。ウォークは橘本王子跡までは熊野古道コース沿いに下り、その後JR加茂郷駅へと向かいます。

出発 JR海南駅 → 2.3km 46分 → 藤白神社 → 2.0km 40分 → 地蔵峰寺(峠下王子跡) → 2.4km 48分 → 橘本王子跡 → 4.6km 92分 → JR加茂郷駅 到着

コース12 大崎の湊

大崎は古くから栄えた湊であり、万葉集にも大崎を詠んだ句があります。JR加茂郷駅を出発し、海南下津高校を過ぎて北に坂道を進みます。海岸沿いを道なりに和歌浦を眺めながら進み、途中で農業用道路を進むと大崎万葉歌碑に着きます。

出発 JR加茂郷駅 → 4.8km 96分 → 大崎万葉歌碑 → 0.9km 18分 → 大崎バス停 → 4.4km 88分 → 女良古墳 → 2.9km 58分 → JR加茂郷駅 到着

善福院

寺の前身は、広福禅寺という禅宗の寺で、明治時代に善福院と称されるようになった。本堂となった釈迦堂（国宝）は、鎌倉時代後期の建立と推定され、その時代に善刹として興隆していたことが偲ばれる建物である。

福勝寺

江戸時代は紀州藩主の祈祷所であった寺で、本堂（重要文化財）は室町時代中頃の建築と推定されている。隣接の救聞持堂（重要文化財）は慶安3年（1650）の建立。境内西方に裏見の滝がある。

御所の芝

地蔵峰寺の裏手に上った場所で、白河上皇熊野御幸の行宮跡といわれている。海南の海は今、臨海工業地帯となっているが、名高の浦や黒牛の海、名草山からはるか和歌浦・雑賀崎・加太・友ケ島、遠く淡路島や四国、六甲の山並みまで一望できる。

地蔵峰寺（峠のお地蔵さん）

藤白峠の頂上部の標高260mの平坦部、熊野古道に面して建っている。正面側柱に永正10年（1513）の銘がある本堂、本尊の石造地蔵菩薩像は総高3mあまりでともに重要文化財。

藤白神社

社伝によれば景行天皇5年の鎮座、斉明天皇が牟婁の温湯（現白浜町湯崎温泉）への行幸時に祠を創建、奈良時代の聖武天皇や孝謙天皇の玉津島行幸のときには使者が代参したといわれている。

藤白王子権現本堂（三体仏）

藤白神社権現本堂に祀られている熊野権現の仏さまで、阿弥陀如来を中心に向かって左に千手観音、右に薬師如来を見ることができる。

大崎港

下津湾の支湾である大崎の地は、湾口が山に囲まれて南を向き、北西に開く下津湾よりも風を避けるため、小型船の時代には優れた係留の地であった。古代から船出の地として知られている。

コース11 藤白坂越 コース12 大崎の湊

海南・藤白・大崎と万葉集

万葉びとは南海道を西に真っ直ぐに進みますと、加太で初めて海に出会います。一方、雄ノ山峠を越えて、布施屋辺りで紀の川を渡り、南下しますと、汐見峠（熊野古道の松阪王子を過ぎてしばらく行くとこの峠です）を越えたとたんに前方に海を発見します。憧れの海に接して、峠越えで流した汗もすっとひいたことでしょう。

これから道は山また山を越え、ところどころに南国の明るい海を眺めながら南へ南へと進みます。まず藤白です。ここには楠の大木が聳える藤白神社があります。平安朝以降の熊野詣ででは、熊野九十九王子のうちでも、別格の五体王子社のひとつとして、熊野への入り口をなします。

ここから御所の芝までの急な山道が藤白坂です。この坂は有間皇子のたどった道でもあります。斉明天皇4年（658）、天皇一行が牟婁温湯（白浜温泉）に出かけて、都が留守の間に、皇子はクーデターを計画し発覚して捉えられます。そして牟婁温湯に護送され尋問を受け、帰される途中の藤白坂で絞（くび）り殺されます。あたら19歳の命でした。この折の皇子の歌が万葉集に収められています。

岩代（いはしろ）の 浜松が枝を 引き結び
真幸（さき）くあらば またかへりみむ
家にあれば 笥（け）に盛る飯（いひ）を 草枕
旅にしあれば 椎（しひ）の葉に盛る

藤白神社から10分ほどのぼったところに皇子のお墓と伝えられている場所（「椿の地蔵さん」）があります。そこに「家にあれば」の歌碑が建っています。ここからの山道を、皇子の思いを反芻（はんすう）しながら登ってみましょう。1350年前の、古代の歴史と歌と人がなまなましく蘇ってきます。

藤白（みさか）の 御坂を越ゆと 白妙（しろたへ）の
我（ころもで）が衣手は 濡れにけるかも

この歌は有間皇子事件から43年後の持統天皇紀伊国行幸の折に詠まれたものです。こんなに長い年月が経っても、皇子の悲劇は昨日のことのように偲ばれたのでした。なお、藤白神社の境内に有間皇子神社が建てられ、そこには若き有間皇子の肖像画が掲げられています。雑賀紀光氏の手になるものです。

藤白坂を登りきった御所の芝からの眺めは絶景というほかはありません。眼下には石油備蓄施設と発電所がデンと鎮座していますが、ここがかつての名高の浦と黒牛潟です。海の向こうに和歌の浦、玉津島、雑賀崎、加太、友ヶ島、そしてさらにその先には淡路島を見はるかすことができます。あまりの好風に息を呑みます。有間皇子はここに立ってどんな思いにかられていたのでしょうか?

名高の浦と黒牛潟は埋め立てられてその姿を消してしまいましたが、「名高」、「黒江」としてその名を現在に残しています。

紫の 名高（なたか）の浦の なびき藻（も）の
心は妹（いも）に 寄りにしものを
黒牛潟（くろうしがた） 潮干（しほひ）の浦を 紅の
玉裳（たまも）裾引き 行くは誰が妻

御所の芝からは橘本をめざします。今は一面のみかん畑の中ののどかな下り道です。

そして加茂郷から大崎に足を伸ばしてみましょう。大崎は、下津湾の中、三方を山に囲まれて南に細く口を開いています。そのためにとても波穏やかな港です。

大崎の 神の小浜（をばま）は狭（せば）けども
百船人（ももふなびと）も 過ぐと いはなくに

こんなに狭い港だけれど、ここを通る多くの船はこの大崎に停泊していくのだと詠んでいます。三方を山に囲まれた天然の良港だったからでしょう。

この歌は天平11年(739)3月、石上乙麻呂が罪を得て土佐国に配流せられた折に詠まれた歌群の中の一首です。当時の船旅は危険に満ち満ちていたことを思いますと、この波静かな大崎での泊まりは、旅人にひと時のやすらぎを与えたことでしょう。

なお大崎は、加太の田倉崎辺りだとする見解もあります。

女良古墳

大崎の湊を目指す山越えの道の起点となる丸田地区の丘陵裾に築かれた6世紀後の円墳で横穴式石室を埋葬施設としています。大崎と加茂郷を結ぶ交通路を掌握した有力家族の墳墓ではないかと考えられています。

女良古墳